

盛巖寺之碑(十七)

いしづみ

三陸町吉浜

木村正継



は次第に引きつる跡、闇夜にて向こうは見えず、ただ悲しみ泣き、「助けてくれ助けてくれ」の声を知るべに足を早めて行き見れば、老児男女の泣叫ぶを見るに忍

し、貧家を恵み、代々長命にして繁盛致しける内、現在の与惣治氏に至り、人たる義務は、国益を立てるのしかずと考え給うて明治九年(一八七六年)に至り、帆前艦を設け十年の西南戦争に陸軍の御用を達、賞を賜り引き続き帆前艦を二艘新造し、遠国取引致しぬる。・・津波に際し、米穀

ん)開祖、青山八郎右衛門さん七十八歳が明治三十二年四月に、上方の上野与惣治さんに贈った物です。被害状況は、色々な数字があります。三陸町綾里の津波研究者、山下文男先生により理科年表を書き換えるに至った、一八九六年七月十五日山名宗真調書・岩手県沿岸大海嘯取調書が

前代未聞の大被害でした。盛岩寺の過去帳では、地区別死者は、荒川一一二人・片岸八八人・小白浜四五六人・本郷七五六人・花露辺二一〇人・合計一六二二人となっています。外に、吉浜字根白の真称寺で檀家の人が、四五人程唐丹関係者らしき人が十五人程居た。

時明治三十有九年

海嘯記念碑(四)

太陰五月五日遭難

びず。

・・以後、鈴木琢治氏の大活躍が詳細に記載されている。・・氏の義胆、後世医師の鏡ともあおぐべき名譽を顕(あらわ)しめ。

余白なき故困難致されたる万分之一を印(しるす)。

大石浜、上野与惣治氏は数代の豪家にして陰徳を施

を始め衣類、並びに雑貨に至るまで救助致し、其上、与惣治氏の所有の高台の地所を流失衆中へ分配致し、遣(つか)わしたるよし、万代不朽の名譽也。・・

この掛軸は、東京麻布一橋角広尾町字八郎右衛門新田開墾地主・神効膺膺丸

(しんこうおつとせいが

最も実数に近いと思われるす。

この調査によると、唐丹では、人口二千五百二十五人中千六百八十四人(※生存者八四一人)と実に人口の六十七%の人が死亡してしまいました。

家は、四四六戸の内流失三五七戸・全壊六戸等と

唐丹小史によれば、六年後、唐丹の人口が、一五四九人となっており、海嘯直後の倍位と多数の人口と家が復活したようです。

津波の状況は、震度二、三程度の弱い地震の後、大津波が来るといふ通常では考えられない特殊な津波で岩手県を中心に、二万二千人以上の人々が亡くなった明治三陸大津波、子孫が二度とこのような悲劇に遭わないことを願って建立した記念碑の心を忘れないようにしたいものです。

「盛岩寺の碑」は、今回で終わりとし、次回からの欄を「唐丹の歴史色々」にしたいと思えます。

・中略、岩手県気仙郡唐丹村大字川目、鈴木琢治氏は、妻子始め下男三人、下女二人、都合八人暮らしにて、間口六間、奥行き十二間の住居にして、家代々医業を致し居り、旧暦五日夜八時半頃、外は津波が来ますと知らせに驚き、下男三人を先に達し、二町ばかり(約二百二十m)行きて提灯の光にて透かし見れば津波に魚鱗は地上に飛び上がり居る。海上さして行くに、津波